



The Initial Factors Promoting Long-Term Care Health Facility Inpatients to Return Home: Examination Focusing on the Number of Family Visits through Research and Intervention

Shimano, Koichi

(Degree)

博士（保健学）

(Date of Degree)

2020-03-25

(Date of Publication)

2021-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7746号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007746>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(様式3)

論文内容の要旨

専攻領域 保健学専攻リハビリテーション科学領域

専攻分野 運動機能障害学

氏 名 嶋野 広一

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を()を付して併記すること。)

The Initial Factors Promoting Long-Term Care Health Facility Inpatients to Return Home: Examination Focusing on the Number of Family Visits through Research and Intervention

(介護老人保健施設利用者の自宅退所への端緒～調査と介入による家族面会数に着目した検討～)

論文内容の要旨 (1,000字～2,000字でまとめること。)

介護老人保健施設入所者(以下:入所者)の在宅復帰率は低下している。低下の理由は家族の意見や存在が重要視されていたことにあった。

家族と入所者の関わり方を理解する為に、我々は家族の入所者への面会に着目した。家族の面会の有無が自宅復帰に影響を及ぼすかもしれないと仮定し、その確認を行った。

本研究の目的は研究1では自宅群(老健より自宅に退所した人)と医療群(老健より医療機関へ退所した人)の家族の面会数を調べること、研究2では研究1の結果より家族に対して、面会数を増加させる介入を行い、自宅復帰に繋げることであった。

研究1の対象者は138人(自宅群:47人、医療群:91人)で、調査項目は各群の面会数、要介護度、自立度、認知度、入所期間とした。その結果、自宅群の入所後2週間の面会数は医療群より多かった。自宅群は医療群と比べ、要介護度、認知度が低く、自立度は高かった。自宅退所に際しては自立度が高く介護が必要ではないという結果のみならず、家族の面会数も多いという結果が得られた。すなわち面会数が自宅への退所に重要な要因になるかもしれないことが分かったので、入所者家族の面会に関する研究2を計画した。

研究2の対象者は86人(介入:38人、対照:48人)とし、方法はいずれの入所者家族の面会時にスタンプカードへ押印し、4つ押印が貯まれば景品を贈与し、対照群は通常の面会とした。入所者の家族数と面会数、独居・同居における面会数と配偶者の有無の面会数を比較した。また、面会数、家族数、要介護度、自立度、認知度、配偶者の有無について群間比較を行った。加えて、面会数を従属変数、年齢、家族数、要介護度、自立度、認知度を独立変数として重回帰分析を行った。重回帰分析では強制投入法を実施した。また、介入、対照期間後に老健から退所した人の退所先の別(自宅または医

療機関)についても比較した。その結果、入所者の家族数と面会数に弱い正の相関がみられた。「独居か同居か」と「配偶者の有無」によって面会数に差は無かった。対照群の家族人数、要介護度、自立度、認知度については差がなかった。面会数は介入群の方が対照群よりも多かった。面会数を従属変数、年齢、家族数、要介護度、自立度、認知度を独立変数として重回帰分析を行った結果、家族数が説明力のある変数といえるが、要介護度、自立度、認知度については説明力がないと判断した。

今回は研究1で入所者家族の面会数を調査し、家族の面会数は入所後2週間において、自宅群の方が多かった。面会数が多いと、入所者と家族の関わりが維持され、疎遠化の防止が期待できる。つまり、面会数が多いことで単純接触効果が影響し、自宅復帰につながるというと考えられる。家族との疎遠化が発生しなければ、自宅退所の可能性が増すと考えられ、家族と入所者との疎遠化を防止するためには面会数を増して、関わりの維持に努める必要があると考えた。そこで、我々は研究1の結果を元に、家族の面会数を増やすことで家族と入所者との疎遠化を防止し、より自宅への復帰が容易になると考えた。

研究2では、面会数は入所者の家族数が多いと面会数も多くなると考えられたが、実際は弱い正の相関にとどまった。一方、介入群と対照群を比較したが、「独居か同居か」と「配偶者の有無」によって面会数に差は無かった。加えて、面会数を従属変数、年齢、家族数、要介護度、自立度、認知度を独立変数として重回帰分析を行ったが、面会数に影響を与えるのは、入所者の家族数のみであった。

これらのことから、面会数に影響を与えるのは入所者の家族数と介入の有無である。差はみられなかったものの、介入群の方が若干家族人数の多い傾向にあったため、介入群の面会数が多かったのかもしれない。しかし、面会数を増やすために対象者の家族人数を増すような取り組みを我々が行う事は不可能で、面会数を増やすには、もう一方の因子である介入を行うことが現実的であろう。

研究2の目的であった介入によって面会数を増加させて自宅復帰に繋げることにについては対照との差がみられなかった。本来であれば長期にわたって追跡調査が必要で、研究期間が結果を導くためには不適切であった可能性があるので退所者数を増やして再確認する必要がある。入所者が自宅に退所できないのは、家族との関わりだけではなく、研究1でも明らかとなっているように、医療の必要性が生じたことである。今回の研究で、入所者が自宅退所に必要な要件は医療の必要性が発生しないこと、家族が入所者の自宅復帰を希望することである。但し、面会数が増えることで老健職員との接触が増えることや、単純接触効果もあいまって家族との疎遠化を防ぐなどの質的効用が期待できるため、今後はそちらを分析すべきである。

指導教員氏名:長尾 徹

(別紙1)

論文審査の結果の要旨

氏 名	嶋野 広一		
論 文 題 目	The Initial Factors Promoting Long-Term Care Health Facility Inpatients to Return Home: Examination Focusing on the Number of Family Visits through Research and Intervention (介護老人保健施設利用者の自宅退所への端緒～調査と介入による家族面会数に着目した検討～)		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	准教授	長尾 徹
	副 査	教授	種村留美
	副 査	教授	古和久朋
	副 査		印
要 旨			
介護老人保健施設の在宅復帰率は低下しているが、その要因には「家族」の意見や存在があった。研究1では家族と老健入所者の関わり方を理解するために、著者らは家族の入所者への面会に着目した。入所者の家族が面会によく来ている者は自宅復帰していると仮定し、面会数を調査した結果、医療群（医療機関へ退所した者）と比べて自宅群（自宅へ退所した者）は入所後2週間の面会数が多かった。そこで、研究2として家族の面会数を増加させる介入を行い、自宅復帰に繋げることを試みた。その結果、面会数は介入群が対照群よりも多かったが、両群の自宅退所数に差はみられなかった。入所者が自宅退所に最も必要な要件は医療の必要性が発生せず、家族が自宅復帰を希望することであると結んだ。但し、入所者と家族の接触の機会が増えることで、家族関係の疎遠化を防止できることに期待ができると提案した。自宅への退所を促すという結果には至らなかったものの、介入によって面会数を増加させることを証明できたことは有用な知見であると考えられる。 よって、学位申請者の嶋野広一は、博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。			
掲載論文名・著者名・掲載（予定）誌名・巻（号）、頁、発行（予定）年を記入してください。 The Initial Factors Promoting Long-Term Care Health Facility Inpatients to Return Home: Examination Focusing on the Number of Family Visits through Research and Intervention・Koichi Shimeno, Toru Nagao, Kenichi Hanafusa, Suguru Fukuzawa, Shigeki Furuyama・Bulletin of health sciences Kobe,35, 2019（予定）			